

## 天声人語

小学生のころ、登校にくらべて下校が、あんなに自由に感じられたのはなぜだろう。童話作家の神沢利子さんが見かけた子たちも、ずいぶん楽しそうだ。

（昼さがり／学校帰りの男の子が三人／通りの家々の表札を読んでゆく／ときどきつかえて考えながら）▼漢字の読めるうれしさと誇らしさ。それゆえに生まれた遊びであろう。温かな目で見ていた神沢さんも、つられて表札の名前を見ながら歩く。詩編「表札」でつづられた情景である。道すがら何げない遊びを考え出す姿は、昔も今も変わらないかがいたとすれば、震えを感じる。新潟市的小学2年生の女の子の痛ましい事件である。地図を見ると友だちと別れた場所も遺体で発見された線路も、自宅の目と鼻の先にある▼地域では登校時に大人たちの見守りが続いているという。「今朝も子どもたちは不安な様子だった。こんな日々がいつまで続くのか」との声が紙面にあった。警察は昨夜、23歳の男を死体遺棄容疑で逮捕した。地域に落ち着きは戻るのか。捜査の行方に気をもむ▼亡くなつた女の子は「おおきくなつたらデザイナーになりたい」と幼稚園の文集に書いていたという。子どもの命が奪われる事件のたびに思うのは、その子の手のなかにあつたはずの未来のことである。不条理という言葉を使っても、とても言い尽くせない▼いつもの道。安心して歩ける道。そんな当たり前のことがあつけなく失われていはずがない。